

一 次の文章を読み、後の問いに答えよ。

鑑賞とは作品を味わい解釈することですが、鑑賞をさまたげる根強い⑦ゴカイに、「解釈には正解がある」というものがあります。多くの人が「正解は作者が知っている」「あるいは「批評家が正解を教えてください」と思っている。もちろん、好き勝手に解釈していいというものではないですが、だからといって自分なりの見方で見てはいけないと構えてしまつては意味がありません。

大学で現代アートを教えるにも、まずは学生に「①武装解除」させることが必要です。特に現代アートは、感覚だけではなく知性にも重点がありますから、自分なりに能動的に解釈する④シセイが絶対に不可欠。受験勉強の延長で「この作品の正解は……」と構えてしまう学生の肩の力を抜いてあげる必要があります。

それでどうするか。まずは何の説明もなしにバーンと作品を見せてみます。たとえば、赤い地の上に滲んだ⑤四角形が三つ並んでいる絵。三つの四角形は上から茶色、⑥ノウコン、オレンジ色です。そしてそのままこちらはだまつている。アクティブラーニングという名の⑧ホウチプレイなのですが、そうでもしないと学生たちは自分の言葉でしゃべりだしません。

しばらくすると、学生が手をあげ始めます。「海苔の上に焼き鮭がのっているお弁当を上から見たところ」。

件の絵はアメリカのマーク・ロスコという画家の絵なので、焼き鮭をイメージして描いた確率は限りなくゼロに近いのですが、②だからといってそれを否定してはダメ（そして不思議なことに、なぜか毎年必ず「鮭弁説」をとねえる者があらわれます）。

なるほどね、と言いつつさらに別の学生の意見を待っていると、「布団が敷いてある」とまたまた日本人丸出しコメントが出てくる。さらには「ポストの中に隠されて外を見ている」や「火事で鉄製のドアが燃えている様子」という非日常的な設定や、中には「滲みの効果で、ぱつと見たときに絵ではなく動画に見えました」なんていう解釈も飛び出します。

要するに、自分が感じたその絵の意味を言葉にしてもらうのですが、物理的には同じ絵でありながら、人によって全く違ったふうに見ていることに、学生たちにまず驚いてもらうわけです。これが「鑑賞とは自分で作品を作り直すことである」ということの意味です。ソーシャル・ビュウのワークショップが終わったあとで、ある参加者が口にいっていました。「みんなそれぞれ、頭の中で作品を作っているんですね」。作品を見てそれを意味付けようとする、結局自分なりに作品を作り直すことになるのです。

ただし重要なのは、ひとつの作品からさまざまな解釈が生まれる、というその多様性を確認することではありません。そうではなくて、他の人の言葉を聞いたうえで絵を見ると、本当にそのように見えてくるのです。鮭弁だと思つて見るとその絵は鮭弁に見えるし、ポストの中だと言われれば確かにそうも見える。物理的には同じものでも、見方によって、本当に全く別のものにみえてくるのです。

鮭弁とポストの中では、見ている側のシチュエーションや空間的な④カイホウ性がまるで違います。鮭弁の場合は、ノウコンやオレンジの四角が地（こはん）の上にのっている、と見るわけですが、ポストの中にいる場合は、真ん中のノウコンの四角は穴であり窓です。つまり完全に閉じ込められた状態にあるわけです。視線の向きも違います。鮭弁は上から見下ろす垂直方向の視線、ポストの中は画布をつきぬけて奥を見ようとする視線です。鮭弁としてのマーク・ロスコと、ポストの中としてのマ

ーク・ロスコは経験として全く別物です。

にもかかわらず、人はそのどちらをも、実際に感じることができます。言葉を介して、他人の見方を自分のものにするができる。「ああ、わかった」と納得できた瞬間、その人の見方で作品を見るこ
とができたわけです。まさに「他人の目で物を見る」経験です。

「ああ、わかった」の瞬間、目の前にあるそれは、本当に鯉弁からポストの中にぐにやりと変形した
ように感じられます。それはまるで魔法のような変化です。「鯉弁」から「ポストの中」のみならず、「敷
き布団」「燃える鉄製のドア」……言葉とセットになることで、絵画がつぎつぎと変形していくので
す。鯉弁でもあり、ポストの中でもあり、敷き布団でもあり、燃える鉄製のドアでもありうるもの。芸
術作品とは本質的に、無限の顔を持った可能性の塊です。

(3) ソーシャル・ビューとは、この「他人の目で物を見る」経験としての鑑賞の魅力を、最大限に引き
出すやり方であると言えます。そのためには、やはり実際に作品を囲んで話していること
が重要です。作品を見ながら耳で言葉を聞くと、それが変形することをダイレクトに実感することが
できるのです。原理的には各自の解釈を文字に起こして、それを読みながら鑑賞する、ということも
できるでしょう。けれども、実際に自分のとなりにいる、その人の力によって目の前の作品が変形し
ていく驚き、そのライブ感に勝るものではありません。

伊藤亜紗『目の見えない人は世界をどう見ているのか』光文社新書

- (一) ㉗㉘のカタカナを漢字に直せ。
- (二) 傍線部(1)の内容を本文に即して六〇字以内で説明せよ。
- (三) 傍線部(2)の理由を本文に即して一〇〇字以内で説明せよ。
- (四) 傍線部(3)の理由を本文に即して一〇〇字以内で説明せよ

二 次の文章を読み、後の問いに答えよ。

【文章Ⅰ】

歴史学は、さまざまなかたちで社会の役に立つことができます。でも、そのことと、「社会の役に立
とうとするべきか否か」とは、別の問題です。では、歴史家は社会の役に立つとうするべきな
のか。役に立つとうするべきだとすれば、どんなかたちで役に立てばよいのでしょうか。この問題に
ついて、ぼくが考えていることを述べておきたいと思います。

まず、(A)歴史家は社会の役に立つとうするべきか、という問題があります。歴史を学ぶにせよなん
にせよ、ぼくらが仕事や活動や行動を始めるときの④ネットウには、たいいてい、生活の資を稼ごうと
いう意志だけではなく、なんらかの意味で「やりがい」を求める気持ちがあります。

そして、身近な人びとや世界や人類や地球や宇宙や、そういったものをひつくるめた意味での「社
会」の役に立つほうが、やりがいがあるはずだとすれば、社会の役に立つとうするというのは、歴
史家に限らず、人びとに広く共通する心性だ、といえるかもしれません。

ただし、社会の役に立つこと以外の「やりがい」にもとづいて行動する人もいるはずです。彼(女)らに対して、「社会の役に立つこと」を押しつけるのは、どう考えても余計なお世話です。そんなことを考え合わせると、先の問題に対する多くの答えは、「役に立とうとするほうがよいに決まっているが、そうしなければならぬ」とまではいえない」という、ちよつと中途半端なものになります。

では、役に立とうとする場合、どんなかたちで役に立てばよいのでしょうか。もつといえ、皇国史観に典型的に見られるように、社会の役に立とうという意図がまちがった方向に進んでしまい、のちに「社会にとつてマイナスの存在だった」と評価されるようなことにならないようにするには、どうすればよいのでしょうか。

皇国史観を奉じた歴史家たちを見ると、彼(女)らの最大の問題は、歴史像をつくりあげる際の基準を「社会の役に立つか」、もつと具体的にいうと「日本の歴史を皇国の歴史として捉える」ことができるか否か、という点だけに置いたことにあります。

むろん、この基準を採用すること自体には問題はありません。問題は、彼(女)らがこの基準「だけ」を採用し、それとともに「根拠がある史実にもとづいているか」という基準を採用しようとしなかった、という点にあります。根拠がある史実にもとづいて「日本の歴史を皇国の歴史として捉える」歴史像を提示しようとするのであれば、それはそれで「好みは人それぞれだなあ」というだけのことで、価値判断としてはともかく、歴史家の営みとしてはオーケーです。

歴史像を提示するにせよ、それ以外の営みにせよ、なんらかの方法を用いて歴史家が社会の役に立とうとするのであれば、根拠がある史実にもとづくという「真実性」を経由しなければならない、とぼくは思います。逆に、「真実性」を経由するかぎり、その営みは歴史学の枠内にあります。

従軍慰安婦論争に即していえば、上野や坂本は真実性を経由しようとしていませんから、そのかぎりで歴史学の枠内にはありません。彼(女)らと吉見の論争が(ア)不毛に終わるのは、いわば当然の理でした。また、真実性を経由しなければならないという歴史学の特性に対しては、じれったさが残るかもしれませんが、それを放棄したら「なんでもあり」になってしまう以上、ぼくらは「じれったくても我慢しよう」というしかありません。

さらにいえば、皇国史観にせよ、上野や坂本にせよ、なぜあれほどまでに人びとのアイデンティティや、それと密接にかかわる「記憶」といった、あれやこれやの集団を主語として語られやすい問題にこだわるのでしょうか。ぼくにいわせれば、歴史を学ぶことには、それ以外にも、コミュニケーションを改善するとか、一人ひとりの日常生活にとつて教訓になる史実を知るといった、個人的な役に立つというメリットがあります。

ぼくらは、なによりもまず一人の個人であるかぎり、歴史学の役立ち方を論じる際には、個人を主語にして考えなければならないはずです。歴史家もそうでない人も、歴史を学ぶ際には、まず「自分の役に立つか」を考えるべきです。そして、歴史学には、日常生活に役立つ知識を人びとに提供する義務があります。

まとめましょう。直接に社会の役に立とうとするのではなく、真実性を経由したうえで社会の役に立とうとすること。集団的なアイデンティティや記憶に介入しようとするのではなく、個人の日常生活に役立つ知識を提供しようとする。このような仕事に取り組むとき、歴史学は社会の役に立つはずだ！そう、ぼくは思います。

【文章Ⅱ】

現代社会の中での科学は、まず「役に立つ技術を生むための知識」とされているのではないでしょう。この「役に立つ」という言葉に、科学者も社会も**⑥シバ**られているのです。もちろん「役に立つ」ことは大事ですが、その意味をていねいに考える必要があります。しかも、科学と科学技術は決して同じものではありません。科学、科学技術、役に立つというような言葉を一つ一つていねいに考えることが必要だと思います。

子どもたちの理科離れを憂い、大人の科学リテラシーの**⑦ケツジ**を嘆く声は、新しい科学技術開発とそれが生み出す新製品、そこから生まれる経済成長を求めているものになっています。その必要性を否定はしませんが、「自然科学」というように、科学の本来の姿は、自然と向き合うことであり、そこから自然観、人間観を生み出すことです。つまり、科学は一つの文化なのです。近年日本では、科学という言葉を単純に科学技術に置き換えてしまい、文化として存在する科学そのものを忘れる傾向があります。

科学を文化とするなら、本を読み、絵を眺め、音楽を聴くのと同じように、誰もが科学と接することができて初めて、科学が社会の中に存在したことになるはずです。ここで、作家や画家や音楽家が自分の作品を世に出すときに、コミュニケーションを求めたりするだろうかと考えてみると、今の科学のありようの不自然さが見えてきます。

私は、ここに科学の問題があると考えています。現在の制度では、科学が社会へと出ていく方法は論文と決められています。論文は、分野を同じくしている専門家に理解されればよいのであり、そのために必要で十分な事柄を書くための作法もきめられています。もちろん論文は重要な発信方法ですが、文化として科学が広く受けとめられることを考えた時には、あまりにも限定された対象への**⑧トクシユ**な形での発信と言わざるを得ません。小説や絵や音楽とはまったく違います。（中略）

どうしたらよいのか。ここで比較してみたいのが音楽です。小説や絵は作品がそのまま受けとめられますが、音楽は楽譜の状態で理解することは一般の聞き手には難しく、演奏されることが必要です。ベートーヴェンがすばらしいと思えるのは、オーケストラ、ピアノなどさまざまな演奏家という「専門家」による表現があるからです。演奏家は楽譜を通して、音楽と同時に自分を表現します。私は、科学にもこの作業が必要なのではないかと思っています。コミュニケーションでなく表現者です。しかも、本来なら音楽も作曲家が演奏者でもある、シンガーソングライターが原点でしょう。モーツァルトもベートーヴェンも演奏をしていました。科学者も本来は、そうあるべきなのではないでしょうか。

⑨「科学の表現」、これは重要なテーマです。コミュニケーションと言ってしまうと科学の成果や社会でいかに役立つかを伝えることとなり、得てして広報となりがちです。論文という楽譜をいかに演奏するか、表現するか。（中略）

では、文化としての科学の表現に対して、広く一般の人々が関心を持つようにするには、科学者はどうすればよいでしょうか。

⑩ガイして、人の話を聞く場合、大切なのはその内容と同じくらい、またはそれ以上にその人への関心であり、さらには信頼です。それがあれば少々難しいことでも耳を傾け、学ぶ気持ちになります。話上手でなくても惹きつけられます。

（中略）最も大事なのは人間として語っているかどうかということです。それを考慮せずに、科学は難しい特別の分野とし、科学者・科学技術者は、普通の人と同じ考え方ができない、普通の言葉も話せ

ない人としてしまうことには疑問を感じますし、それをしてはいけないと思います。

（中略）

専門家の言葉を受けとめる社会の側も、「言葉の意味をよく考えることの大切さ」を改めて認識しなければなりません。とくに、新たな技術を標榜する新しいキャッチフレーズが独り歩きしがちです。（中略）

今回、原発事故を機に関心が高まった「自然・再生エネルギー」という言葉も、自然エネルギーとは、再生とはと考えてみると、実際にそのエネルギーで社会を動かしていくには、社会のしくみを変えていくほかに見えてきます。現在のようない極集中型で大型化をめざす社会には、太陽光・風・水・地熱の利用のどれも向きません。地産地消型の小さな地域を基本に置き、経済価値からだけの評価ではなく、生活すべてからの評価で事が動く社会に変わらなければ、自然エネルギーの活用は無理です。

こうした社会の方向転換が、専門家の力だけでなし得ないことは明らかです。けれども多くの人が、社会の変化の必要性には眼をつぶっているために、メガソーラーという自然・再生とは合わない方向へと大勢は動いています。ていねいな検討が必要です。そこでまず専門家が言葉を大切にし、誰にも話を通じるようにしなければなりません。高度の専門的内容そのものを理解させるというより本質を語れなければなりません。それには、専門家が専門の中だけにあるのではなく、聞く側の人と人間としての共通基盤がなければならないと思うのです。しかも人間としての魅力を持っていたとしたら、それは素晴らしいことでしょう。

中村桂子（二〇一三）『科学者が人間であること』岩波書店

（一） ①～⑤のカタカナを漢字に直せ。

（二） 傍線部（ア）「不毛に終わる」の語句の意味として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ① 成果が得られず、無駄に終わること。
- ② 議論が白熱し、決着がつかないこと。
- ③ 相手の主張を認めず、平行線をたどること。
- ④ 議論の前提が崩れ、意味をなさなくなること。

（三） 【文章Ⅰ】傍線部（A）「歴史家は社会の役に立とうとするべきか」という問いに対し、筆者はどのような立場を示しているか。その理由を含め、本文に即して一五〇字以内で説明せよ。

（四） 【文章Ⅱ】傍線部（B）「科学の表現」について、筆者が音楽との比較を通して提案している具体的な方法について、本文に即して一〇〇字以内で説明せよ。

（五） 【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】とに共通する主張はなにか。両者それぞれの具体例を示しながら、一八〇字以内で説明せよ。